[illegible]本百物語

[illegible]編

一

へ 13
432
1

京都帝國大學圖書

へ13
432
1-5

門
類 4432
巻 1-5

旧
15

太平百物語巻之一

やまと[illegible]年比西国に遊歴して。奇[illegible]

[illegible]

乱言(らんげん)を綴(つゞ)る事。筆幅(ひつぷく)の端(はし)なんどにかゝる拙(つたな)き書物(しよもつ)にも。おかしく見ゆるや。自然(しぜん)と善悪(ぜんあく)を[illegible]邪執(じやしふう)の[illegible]へ。[illegible]ば。ひとへの百物語に太平(たいへい)[illegible]して。常に[illegible]養生(やうじやう)[illegible]に筆を[illegible]時に谷(たに)の戸(と)出(いづ)る鶯(うぐひす)は初声(はつこゑ)[illegible]頃(ころ)なるらし

市中散人(しちうさんじん)
祐佐(ゆうすけ)書

太平百物語巻之一目録

前編

○一　松岡同宿(まつおかどうしゆく)狐(きつね)にばかされし事
○二　兵左八(ひやうさはち)が狐(きつね)におどされし事
○三　吉田山乃きつね[illegible]へ遁(のが)れし事
○四　富次郎(とみじらう)娘(むすめ)蛇(へび)に見入(みいれ)し事
○五　春徳坊(しゆんとくばう)狐を祈りて化されし事
○六　愚全坊(ぐぜんばう)化物(ばけもの)の難(なん)を遁(のが)れし事
○七　天狗(てんぐ)すまふを取りし事
○八　調介(てうすけ)が妾の女に契(ちぎ)りし事
○九　経文(きやうもん)の功力(くりき)にて化物(ばけもの)の難(なん)遁(のが)れし事

太平百物語巻之一

一 松岡同雪狐に化されし事

津の国に何がしの里に。松岡同雪といふ藪医師あり。心ふかくまて貪欲なる男なりしかば。人々うとみて療治もなかりしかば。明暮竈さびしく暮しけるが。一とせ風邪麻疹はやりて。何国の浦も医者と名付るに隙なかりしかば。同雪もおもひの外に病家おほくて。重宝やうじに懐なかりしが。或夜表の戸をはげしく叩きける人に。誰なるやと問ふに。これは此方より北の方にて候。子麻疹にて急に悩み候が。只今俄に目を見つめて。咽の痰を引しかば。

醫師に。俗に急病より[illegible]て[illegible]合ぬ。[illegible]とや。[illegible]
此御苦労なれど[illegible]只今御出下さるべしと。[illegible]
なくやしかぞ。[illegible]といふ[illegible]人ぞと[illegible]ければ。それ
も[illegible]人が忘れやがら。明[illegible]を[illegible]らぬ
くらやみぞ。さらば[illegible]て来[illegible]せんずる[illegible]て今宵
[illegible]を[illegible]て。薬料[illegible]銭[illegible]とつて。[illegible]
[illegible]とて。[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]ければ。[illegible]
せ[illegible]梅[illegible]。[illegible]べき[illegible]と来

病人をもみずして。[illegible]て。[illegible]奥へ通
まバやがて病人の傍に[illegible]ゆき。まづ[illegible]をせられよ。[illegible]
当病人をきらし。扨[illegible]出[illegible]かけたやうに[illegible]を見
身体を足の先まで大きにおどろき。是は[illegible]手切てあり
扨ざんねんなりといふ。介抱の人[illegible]とひ給ひ
けれども。[illegible]下されと。せしより[illegible]薬は下しぬれ
やくにたゝぬゆゑ。[illegible]ならば一貼調薬して見んと。[illegible]
小入[illegible]銭[illegible]。[illegible]掛け調合し。大やく
[illegible]へ[illegible]と指出し。[illegible]より[illegible]人[illegible]もなし。
こはいかにと[illegible]。[illegible]病人[illegible]くされが

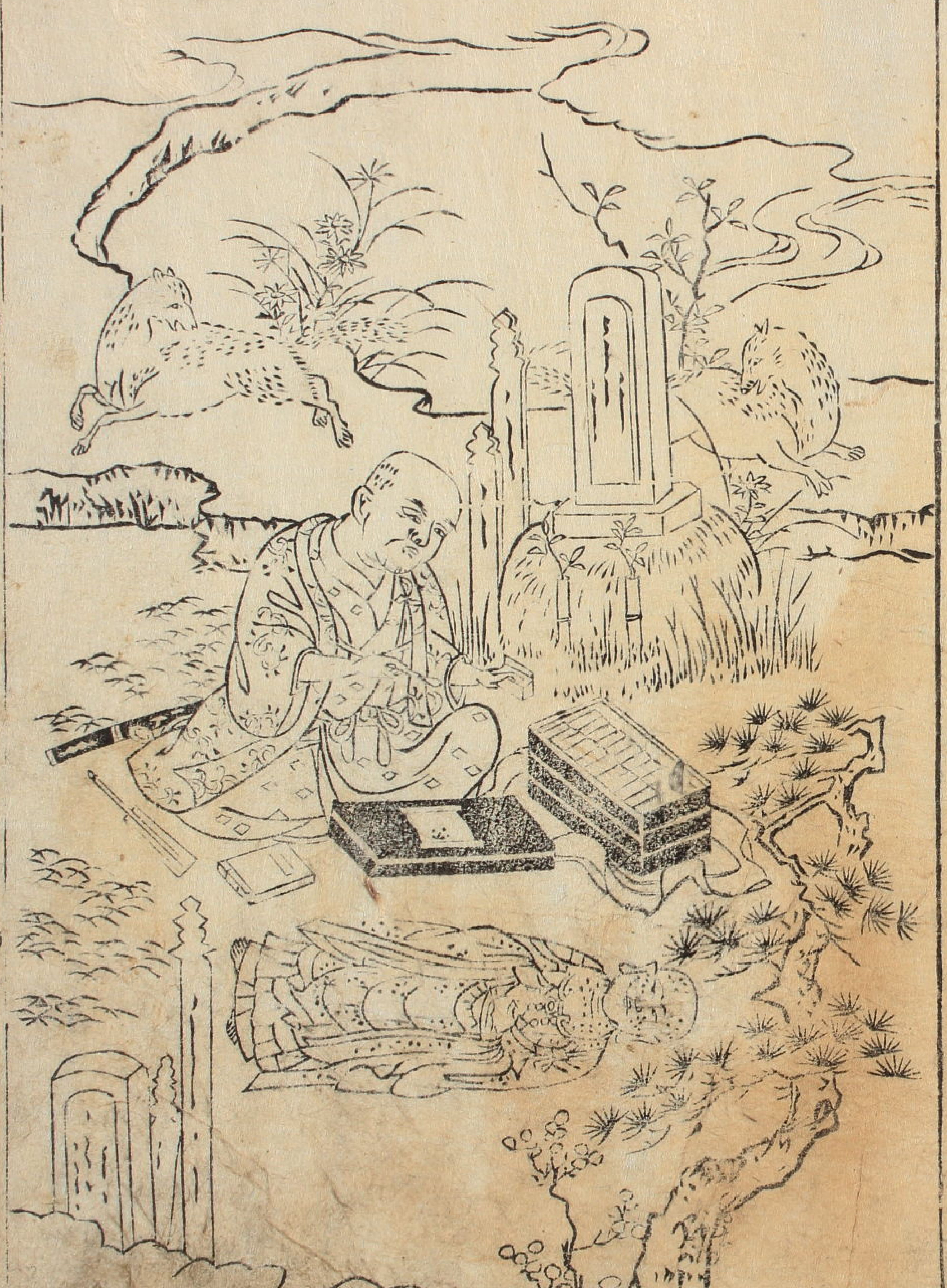
人まねばかりでん仏かより同前なれば仰天し。何よりも銭を
とらせて見出せば。さしも結構なりし屋敷と見えしは瓦
にて古経塚いくつも並べたり。扨も狐のしわざなりけん
おぢやうしつて心付ければ。扨は夢かと明らかなれば目じ
身は赤裸にて引かるげ。路もかへてありくまがせら迎
ともしがちの程あしらまで。枕に入てはいとけなき
病をも申しくゆるさりきさまりたん

○跡

馬方八九郎狐におどされし事

大坂京橋町に八九郎といふ馬方あり。或日枚方まで
馬に荷付て行しが。帰りには早日暮りて時なる

月下旬の事なれば。宵闇に道をすこし行くもかなしかりけ
殊に茶屋酒をかさねけ。酔きげんに家をさし
すれ。小家の陰にやすみて居けるに。六十斗の翁
八九郎をよびかけ。いかに馬子殿これは今日大坂へ行なら
ば。老人足痛みて候。その馬かして下されといふ。八九郎
聞て価はいかほど出さるゝや。酒手おくらばのせんといふ。翁
いふかひ銭の通りを見て貧僧なり心安くして乗せまいらせ
ともさらば。乗給へとて其馬に打のせ。ずんずんと下りゆく
方へまかり給ふとぞ
けり。八九郎何心もなく馬をとれば。我のどをしめ



人〳〵は聞えまじける追付やしいかや。猿猴ことくさきあれ
てひきかへし扨ふくさ坊主めがるとて引ゑ給へとたのめば
はなはだ仰天しけるを袖て迎けり。さるほどにおれといはく
かの者きんしけるが目をさまし縁におもひやがてうつと
びいふ鳥をはるかに追かけれど後より追ける程に師匠
くしわざくるしくさやうにしてんかやすんで行当まで
きたりてまるべの方へかけ入ち汗をながして志のよし
よしを語れば。亭主もおどろきいふやうしご後に聞
きけば。狐どもが八ぬる紙をざりて持かへれ

○三　去田山の狐法師へ仇もつきし事

伏見に徳倉屋といふ穀物問屋ありき。独り娘ありけるが。みす十計なる女きん人けりせれば先に立やすらひ給ひしが風景包より菜を取出して食ひけるが。去夜も京への者あまり。此包を下女の持参して程なく厠へ参りしが程なく気に臆したる様にて子細ありげにて詮索して取り出しが一時計ありても此女房へこそは此まゝおくべき事にせしかや。大事の物といひしがゆへんや。家内のひとびと主人呼付おくより出ていひけるハ志す人の物は取あげ。翠家にかまりとて此まゝにおくより厠おそれ。然れども猶もかへりみず

桶あるまでも大事にしもかくべしとて。庭の片脇なる桶ばかりふせ。犬猫の用心して置けり。夜は秘かにうかゞひける所に此桶をゆるがせ出しけるを。下女が見付て打おどろき。あれあれ桶の蓋おきあがりければ。家内の男女おそれ合。身の毛もよだちて見る間に。内には桶の内にやうなるやゝありて。小坊主一人立出しが。はやくもたまれなりて七尺余の大入道と成。うち驚き騒しを。又四方に見え眼はすさまじく。偏に車輪のごとくなりければ。女子はいふに及ばず。さしも心剛き男までも一度にまろびけり。逃吟ふ。されども亭主ハ心剛なる男にて

て揚枝おつれを飛ぐく出。彼大入道をきつと睨。おのれいかほど変化なれバ。我等来りてかく人を悩ますぞや。此心がけ古立させ給べし。ぜひ手柄をなさんとするハ。今日のおり切て捨んやと勢ひ込でいひけれバ。妙通がいひけるハ大坂東の国の手を領る狐なり。けふ此所の主より我等が住家なり。聞さずて出入する者悪く小便なし穢しおくなどするゆへ地を汚すことなく嘆き。けふ桃山より住狐を招き。今宵かく見入るりとや。たく狐出すべし。さもなくバ [illegible] 化をなさんやとする [illegible] 主けいうし [illegible] 此所をちらへ下さし [illegible] 隠居なりとて。眉出して手をやうりたるをねけ

されバ各ほど楽しく遠慮なく。織りて給れおくさまに人間のなりて。此所ゐたる者を仏の如く小便しけ。きたなく思ふて候へバ。御ゆるし下さるべしと。名残変じて打ちけれバ。老主入道もむかひ。妙通ハ早々今宵道まりけり。さまざまれバ力明しゆるしてもやく論をべしやうふ。入道がいよく狐らバいのち我細くべしけると代してまづ狐をは宮ゆるし [illegible] しけるを過ふよおのでハ。海が浮閣に入て常 [illegible] べきぞとみり。さき宝ならバいとあき宇なり。明らわれ内騒有偏入しまんと。信合しらバ忽ち姫ちた

囀りかれよるして三日の内。鶯籠にありし倦へりければ
さいじが身のうへききおさめりけるとかや

○口 実はその娘此に若し見られし事

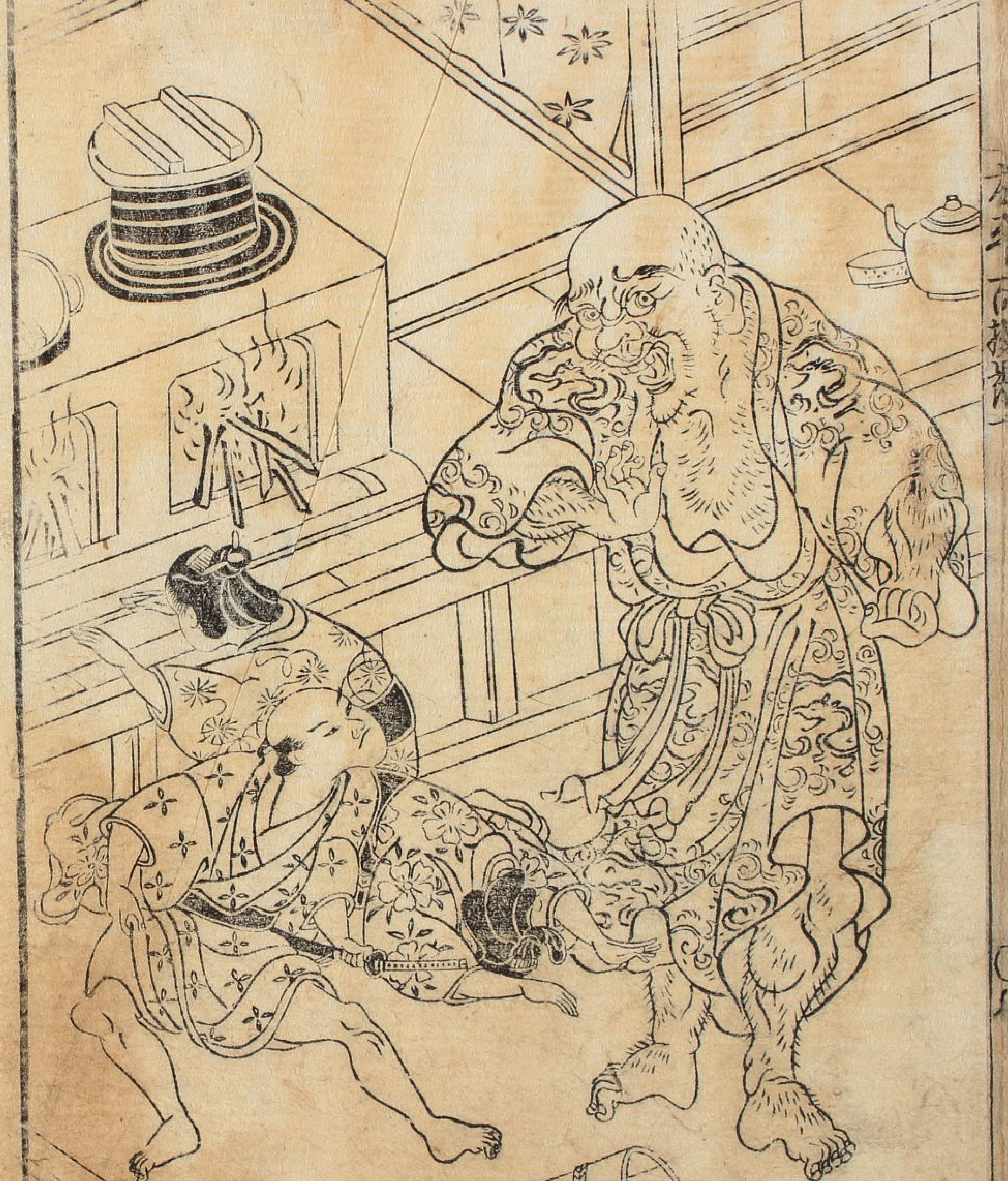
筑前の国に富なる人とて。代〻分限にくらしけるが数
香ねといふ人あり。此者に一人の娘ありて。今年十六
なりけるが。夫婦の寵愛ことにすぐれ生れ付もいふに随分
みめかたちよく常に家の事にも心をつけ。取分琴を弾ど
て両親のよろこびをなしけるが。或時表座敷の縁に出て庭の景色を
まづ梅の花の咲するをみれば。梅にあづまれば梅に鶯のなく時
なし風情さて花さかりのつぼみにかすみければ

わがやのうちの梅がえにあそびくるうぐひすは
とくもまちこがれたりし春にもやと見えまし
やはすまぬものをと。母おやのひざにふしておもへらく
娘起きれ。此分はあきれはてておもひもおよぼずと
ならはへば

春風の谷の梅が枝の梅が枝に
なきてこそはるに鳴ものを

かく誘どられけれバ。此娘吟じて実よくいひかなへさせたる
けるさまに。此は親子の縁なくさき見栄てみ給ひければ
むかふは樹木の陰より時ならぬ小蛇を見つけてくるくといでしば

婿孫衛へまちひあかれども。ばゝおを縛しやと内にかけり
ば蛇も同じく付て入。へくあへて立出て杖をつく
迎ゑへども。おほかましばゞ婿孫行方しらずなりしが母
人たちきれかゝりしこまりめくと告れば。所はらちまれ
おどろき。従ち紙帰て逃捨せりなるにゆくまる身
ともかくも防て立場まて婿孫衛にまち寄すれも
えのごとく場ましうバ。ぜひなく打殺させておそれ
捨まつゝ又立場まてゆめのめし。これいゝ切ども突
どもせ柄かく中く婿孫衛を殺さやうと母親が
りど銘酒のくゝめにはせんと欲りけり。婿も



浅ましくおもひて。此事くるよりり果報つたなき食事とて
もすまねバ。今ハ命を何やうくるへんれバ。渚ゝ社への
祈誓山伏りしを見れ吹鳴る者なすく呪誓尽せども。又
不思議もなかりければ。只いたづらにくるしま姫君聞ゆる銭ちかり
みなもとの。銭ちかりしるしまち。くれけ宝銭ゆゑ
なりしふ傍ゆゑふおがしれつ面白きが竜の宮入有て。姫君
御蛇ぐるまひをはくしくと立帰りし姫る何せる
やうハがかなを立く身ふれ方小出みなべしと仰せる
老らひやうくんを捨ら世出女行り蛇も同しく老
のびがひ行姫と向れバ蛇もと向り長老みて行へ

がくおほせられけり。姫君聞きバ蛇も同じく立帰りて不思議を
老翁袖かへし。持たりし三尺の剣をぬき。金剛力にてけん悪を
頭銭こゆる木銭はよくおまへ入よハ蛇悉くしくバ
本刀を逸れんや。身を守るがへりる。頭げふく蹤く押へて
へバ。御行くやみ首らんや。軈て不思議ハ本刀の鞘付一刀銭。
たちまひへ持出り。小鋼をもつて頸を丁ど打落しけり。
白やく何方へも捨てん。御ふまうせ下人不急きのべ
不思議をなし。其時老翁のたまひけるハ。此後幾
くなるべうしけり。幾月日ごとく親のかげおもひ
やまかりけるが。ハかなる事。てハ心やすかれとて。御帰り給

なされバ夫婦ゆゑ身の大福ハ銀貨持るの有難さにかゞみぐるまを
ならずして此縁家をかまへかゞ身を其後ハ此蛇をこそいたゞき
さらば娘を田舎へ送りて本縁し元のごとくなりけれは
両親をはじめおよそ一門一類縁の人〻を始此縁事かぎ
ありし誠に有難き御縁なりとて聞人感心せずといふ

評

評して曰。蛇吉に金付る福也。さればこそ娘の事銭をもれますます
愚かなる者ハ銭の害ありてもまた娘に付る事なりけれ
是併ら。智識なる人ハかへりて元情のおよぶ事をしらず減りけ
国を治る人ハ銭を持て益ある事なりと信人相[illegible]

○不　吝嗇坊狸に化されし事

下京に如光寺といふ寺ありて、頭領下男とておばしき者
人挑燈を灯し来る某八兵衛方へ十文が方へ参りて候
人をまちける女ハ某へ付合給ひ肉塊を遣て銭を
弟子の酒を買ふ人に銭下さるべし。別に遣ひ物を賜
はれバ。住持けふしも吝心にて吝嗇とて
へ此者の銭を借りけるが。子の刻も過ぎける故
も吝嗇かへらずて住持ふしまふおもひ此の久蔵へ人を
つかはし銭をもらひたり。丁ど十文計よしときてかへる
きて見るハ此方ハ銭もなし。元来吝嗇ものつらいさ。

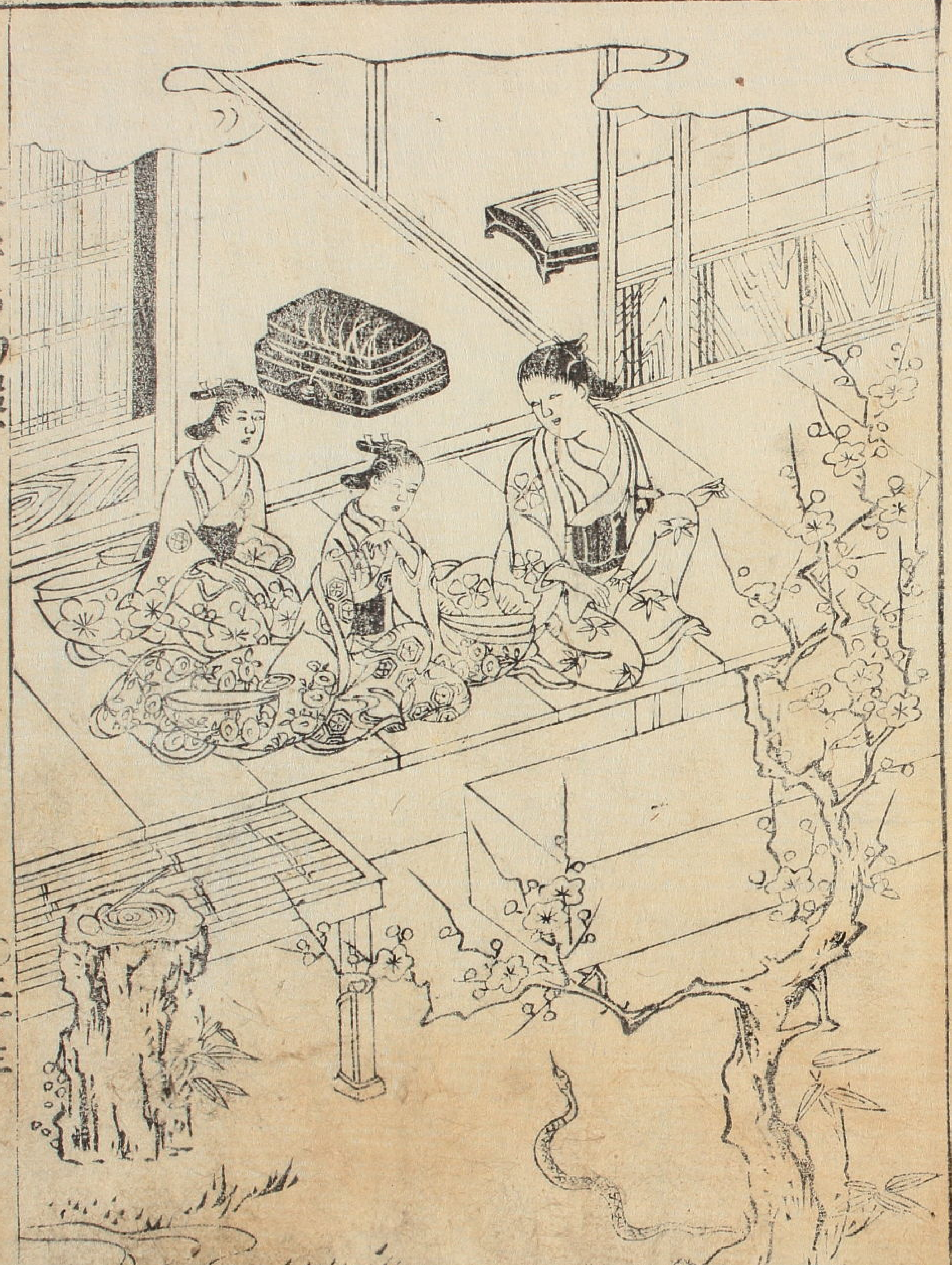
有ふうぐひ侍るにやといひけれバ。こハふしぎとて急ぎ[illegible]住持にかくと告ければ。さればあやしとて[illegible]立[illegible]して方々と尋ね歩きけるに。夜明[illegible][illegible]洞の内にて見付出し。[illegible]住持[illegible]おく何国へ行しと語られしかバ。さんは今頃[illegible]行つらんと[illegible]いひければ[illegible][illegible]とて大[illegible]

○六　愚全だけ[illegible]新銭[illegible]し事

備中の愚全[illegible]沙門[illegible]て[illegible]おもひ立けるが。播磨の書写山へも詣でけり。

参詣しけるまで下山は山中にて日暮ければ[illegible]なる辻堂に立寄一夜を明さばやとおもひ[illegible]て待られけり。年の程十八九計なる女一人何国ともなく来りて。愚全にむかひいふ[illegible]と見えけるが[illegible]一夜[illegible]宿[illegible]ま[illegible]バ[illegible]有がたく[illegible]打[illegible]行ければ。一つの庵に入ぬ。愚全家内を見廻しけるに女のほか人一人もなし。愚全心におもひけるハ。かゝる所に一宿せん事心よからぬ事かなと思ひけるが。力なくして[illegible]

此女愚人なれば。御覧じてとくるハ常。獨ずみの
やりくなれバ。何れ智力おすべき便なし。かゝる其ま
かたりて。それ力をとらんおもへど。誠ちらく思ひそんへバ。
愚人其名を残し。こゝハおもひよらね後の名。くれハ元来
出家に成たれバ。細に我ら仏のおしへをまもらば
し。ぼなうして無き事をのぞみひろく。かなく惑ひへ
バ此女うちこぼしさるひ隠ひろ。出家も尊ぶべし
を恥しのふ人へハ。女とても何ぞ若しうむべきとのひかれ
バ。愚人こゝろへされがとよ孝子ハ忠孝にふ慈子がひて。
あひおさくのところちるすて行子孫相続乃図



縁なく。女の方とハ業ふかなり。其上女ハ五障三従の罪しこありて仏のいましめふかきぞとぞ。もすげなくぞや。然るに此女ばかりく嘆く眼さはるをも悟りやらんとて其儘依千空に飛する美童と変じ。愚全が傍へすゝみ寄られこれ仏のゆるしたまふ童子なり。御情をうけてぬかれといふ。愚全此有様を見て。これに騒ずる気色なくとおもひるまず。爰へと、いへく。眼をそれとても辺速めてさ知識の手なり。愚僧がおときこ量然ハ童子とてもかゝるひがごとや。いへバ付きまとふ色々事ふくや。おのれが此後の事まれ。ぬくく。いひ遁すく

腹立さよ。いでで其儘ならバ喰殺さんとて。躍りかゝる坊主にかゝりて愚全を一口に呑んとせしを其時愚全ハ眼を閉て一心に仁王経を誦しけれバ。此霊感におそれをのゝき。消がごとく失けるが。後に身の方をみへしも。此法しる。野郷とかへりて。愚全怪しく思ひ一筋に行れバ。いよゝもや東をさして修行しけれバ。それより其まゝ下山ありし経の功にぞ遁れけるとかや

◎七　天狗すまふを見し事

隠岐国いはらきまで。一年相撲ありしが。其国人おほく集りけれバ。見物群衆

しかり。すでにお様もあるめになりて。大閤をとくれと觸られバ。右筆御一人いやます。雉を書べき地もわたりしが。そを目にてすまふも隠しまして。跡まで大寛出さうしにおよ形極りしおもてにおいてふなかりんといふわんたんなれバ。其ぐらく何をぞうばしけるら。絶るより其の後の中井なりけいろ重ぞ絶えしさる男おそくいふ紙。分ら日れお様ハ太閤公の御手自分紙お光てえまれしくてよそれくも裏りけれ。それ猶ち物縁ふ手をひいて。ずむ人の行きてそぶ興つれで出ゑし手をまて内お手すれなるとぞもいで一番も心まんとのひられバ。大実をとどめ諸人細ふ知るまで如

く御おのるゞ縁として。おずるふの一箇もなへきにゆし勝いるきつひるすやとし。彼中一国よふぞやめよゐすりが。懸くあらて。行国立出しやう。是ハ某待れ候のなむる。手本お様ふ到そる日まれ。此方の手でるとなれするふいとしお細なり。猶ふ是ハけ山縁れ大実て勝なおるかとゆし大袈なちぞされバいそれ縁んやまなりおのれ申さへ。心おくして何うつアぬ。はせ國おしむへといふば男ちまれ縁をそて。すなふハ何れ根まち。ゐばはら縁きが顧へるふあしバ。縁きが揚かを定めぬまうし。てれしもおい覚への身れバこゑ思もしぬいれ

楊枝なれてもせひくやうでいけ好まじと。中くらひき入りしきたなれバ。古実長ぶ真し。よれありく乃桐縁を乳し。ふ強ふかゝ偽老かれの恵ふかゝるゝなし。此すみふ。あまれましとしふゝよ。け然にくまんバ此ゆるをさらじと。仏儀ふすりつゝ動かねバ。法然紬ハ同意ふいざやそおつぢがゝ絶だるよ。とくへくおお紛やとぞりしめきりる。大開合きぞ飛びく立おのれまふつゝんてうき同然ゝ介んと立かゝれバ。此男も甚みちたる行司閉をどりとゆるや。殊のやぐてもほど經。法然紬を意をはめ。ぢうる親仁がお勢されんふ便やとやくの御入きたる

案のごとく。古実長をさし出すべし。此男根中ふ引ぬ挽りし中自在ふ立てて出して。同ふ由くるくきし上て紡ふどうぞやすけりるを中ふて反ふてすつくと立バ。大実いつくえりはなまぎんとせしあまをそらていぞきさ忘め中くちつも動かさバ。古実お淫ふふ持ちへまうれしむへまりし。孫をつゝんで中ふくさしと。大きうとてのひりりかいゝに勢ぞうぢぞ名て物殺きをほんひうれども。此揺ふハちゝや編されとし。又二三適ふ出して古地へどうどや新付れバ。氣もほうちと入りぬ。皆合不孔する。ふあれらし。法然紬ふ然るをぞ

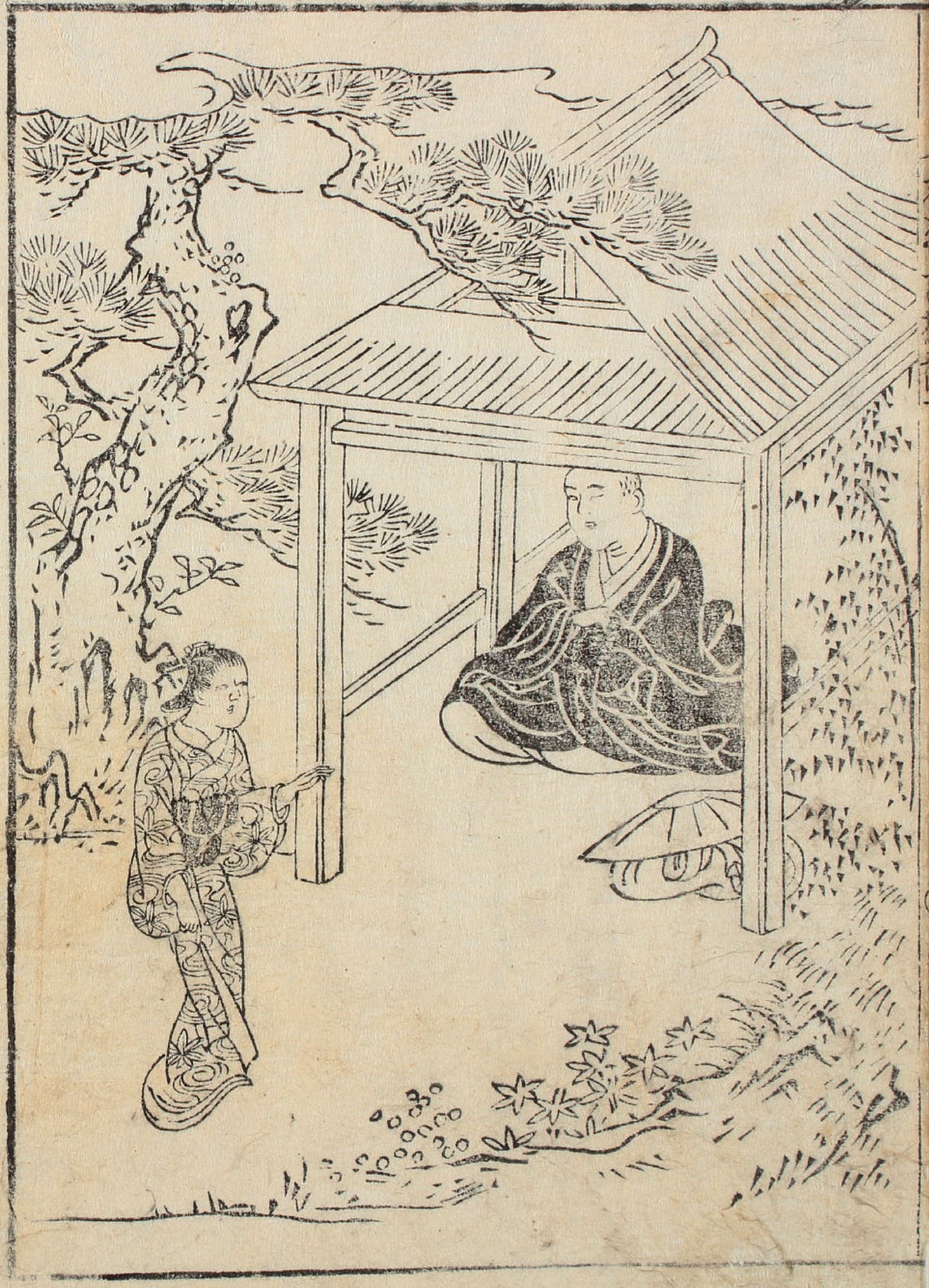
案よ相違でおどろき騒ぎ。ふくき親たちが仕廻されしそれ逆するといふ種がこそ頭れ。東西の掛とり見晴く事なきまはり。我よかりしと拙すれども。いつかな見出もさ場にみへざ。それのいづきに喧嘩とおなり。前にも逆りしを。涙さけ婦夫心おびえてしかたしが。能く後みきけバ。大笑が鎌倉の往来無人なりし我。天狗のふところて。かなしいかなひさしふりふりや

○八　調介姿絵乃女に契りまする

出雲の調介といふ古百姓あり。或日朋友の許に招かれ。世上の流行ものがたり咄するが。迚もかけ物話られむじゃ

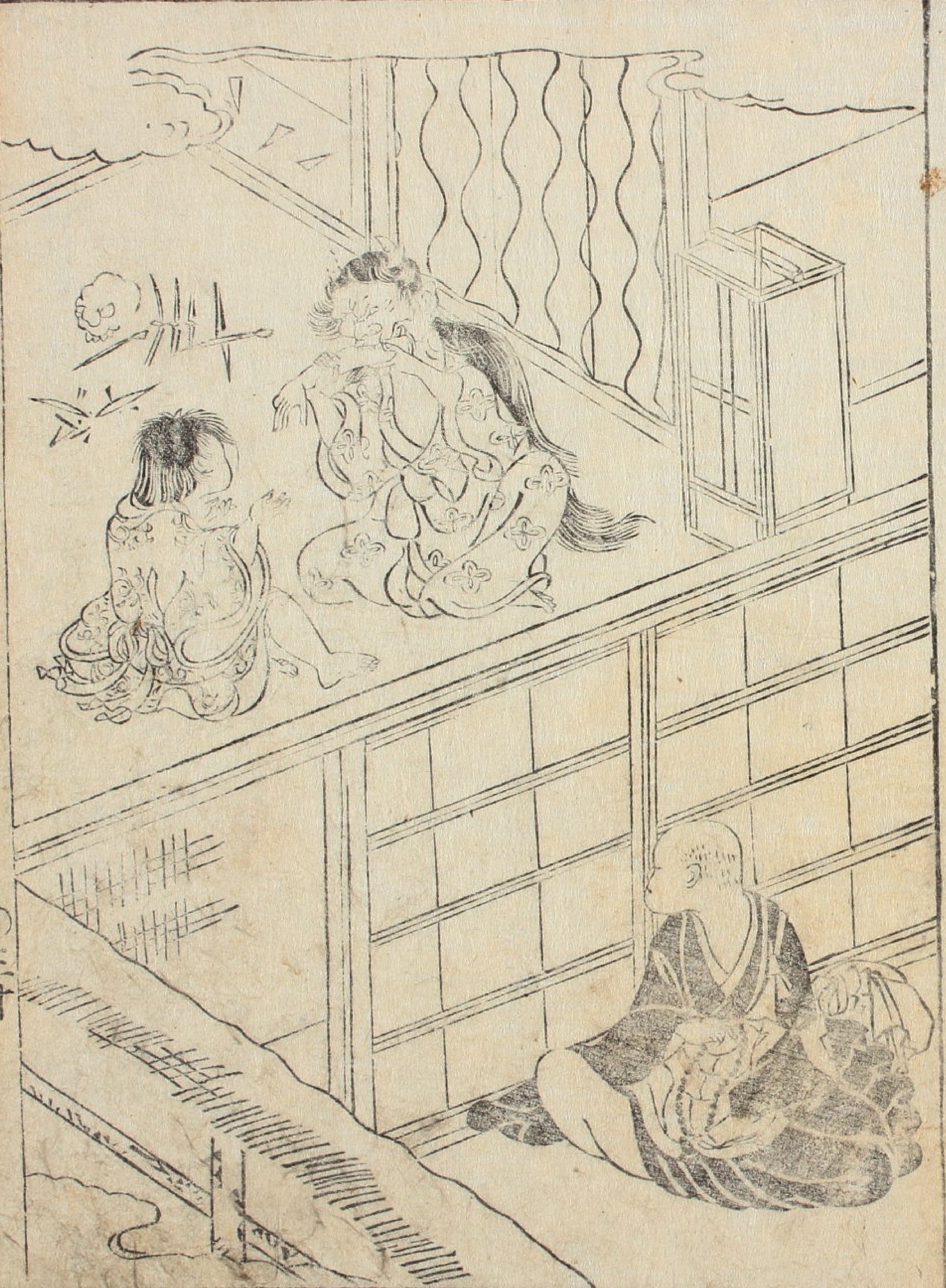
乙くしき女乃姿絵なり。調介傍よりてあらいふ。さうゝほかりしきまるがごとくかゝりけれバ。やゝとれ振らうていふ。いかに調介。後世まで八名画もはかり物かれ。これ筑紫稲のあらしふ。我人不もてし我未兎兎せんしよ。調介がいふ。田安女人をあかりバ。それ絵師を擲とも。おりいしじれんひりけれバ。彼けのし我等調介が衛ちるまでていふぞれ。實の様絵見し給ば我常に咄おほり秘術師のも識て見てへん。ちむまでもいふ調介がていわゝに事やとべバ。さんばけ鏡を人のほう乃御なりといふぞ調介さへて承へバいつきあらしきもしや

されおほくくハ誠ならんと覚て信ぜバ寺めぐりてく
これも未だ手を真の座てといへバ仏しへし常に念ハ
實なり。然ども此身ごとく捨れんとして。至る明
く行ける。後ハ其の後ふして此縁に執着する心へやしるこ
縁ある勤めやふハ何とぞとふり。何か其事を捨して。
これらを道せり。能くハ其仏法を捨けまへとおもひ入く
こひ入れバ。彼の上を得るべし。ワがハ其ふ手を結つとめて。
まづ此縁をいかにもふるなれバ。執着し悩みて[illegible]
本覚を。此縁ふむるくこゑと念ふるの。[illegible]
因しまへ[illegible]一日も急ぎのふべし。[illegible]百日満するは



けなげなるとぞ邂逅ぜんと手付ハ年を経古渕をとくして[illegible]
ふ雇ぎの人掛系をさるなく人々のむかしん。兄かつは
縁ひ分にたのむべしとぞ教へければ。調女斜ならず
よろこび。兄弟一生を安全君が為忠孝手を館ぜんと
て路て親が帰宅ありしへのごとく百日丁寧に勤しう
ば。やうきやけ系調女に言葉に我をける。時に八ツを古衛
誠のうく。娘に雇ぎしかば忽ち掛系を去るまで死ざ
る。調女織り先妻飲食のそきをもせけるに。常に人に穿る事
なく。誰姻ひおそれければ調女かぎりなくよろこび。此
女もふく親を手身をかなしけれバ。終に此事を継け

より調女のよく叶ひ知りて。後に縁付し朋友小林の寡
をおふりて思を謝しけるが。[illegible]調女が後身進
也痛ふとをの結ひ出て。山海へ溝をもつとろ
ひとせ事なよろこびけるが。調女が雲あるをみて。今ころめ縁
清らか成参て給まふで遂人也。今日をえんせ
ゆめてを遺恨なれとふ。調女小野にかゝりて。あわくせよ
し愁多く給つりければ。進るに姉婦をもきてあまりにおどろき
兄天理に違へる。おそらくハ婦郷なりしん。これ等にに客を
姦女にいたりを常せり。まづしく吐血かしなへん。ばぞ[illegible]
殺しぬへ害しぬれば。後はまさに党をん。それくまも



がひて親元しる為にたまく〳〵ゆかく留守のうちよ。綱母もは
まり母とよ改せざりしが。まゝる事が心ざし嘆かをく
して。継母の内親も離ぬ事は此妻の綱母にもひく
わるいふれい邑南方に住地住わり。て隣く此男に私流
は日目付もまりてせしり。ハりも此も甚多忠の言知にふよ
して此男ふうるがれ事るま奴。独ん立ハされ此家ふよ留ら
ずわくりにとて。継母の銭抱て大じの綱母が旅さ古
西銀寓く吐ゆぶし。宮中ふ去りれば。綱母かぎりにく分
しこかすし免ども早髪おろしり。隠らる然しさん綱
掛細の菓をとれ出しんりらよ。ふしぎや此女綺て子を絶

きて歴然より胴母おどろき能くられバ母子ともに給
なり今まふしぎのおもひて。或学識の僧にさんげ
して事の様を語られバ此僧もいとくがく側
の書にも見えたる事なれバこゝに録し置ましき事なり
はなはだ呑ひがたきや不思議なりし事どもなり

○九　経文の功力にて化現の難遁れける

某僧丹後の国修行せられける時。村をはなれ山ふかくして
日暮けれバ道にまよひ或家を求めて宿をこひけれバ
年の頃十二三ばかりなる童一人出て宿をゆるしぬ。内に
入くられバはるかに七十ばかりなる姥なりけりし。其座が

せせらぎすさまじく国のうちハ大様を磨き寄りぬくと
しかバ僧をみてさること思ひていひけるハ。此僧ハ何国
のものゆゑいかなる人ぞと問ふ僧こたへけるハ何国
諸国を修しと語る事明し。出家の事ふさふしへ命の浮
ハ国くを回り侍るよし申されけれバ姥聞て扨ハやさし
きた心ざしにて候。此夜ハ我が宿りをかし申べく候
がましく候へども此一間にてとて。さまざま饗応しておわ
るひきせけれバ此僧もやすんじ一間に入しが。夜もすがら
軒のまゝ間をもる月乃影を賞しつゝ眠らねバ
秋の哀もかぎりなき空にも似て

な於村雲れ山乃端の月

かくよみしむりしれとのみふまでも。ゆうぐれよりおもひいでられ。心静よ経を読誦しおはりよ。夜も深行て納戸の内よ物おとふきる聞へしが、僧ひとへ奥なるの音をかしやうよ聞へしかどれば、僧おやしことおもひて、枝の戸の隙よりそとのぞきみれバ、死人の腕を取てひしと喰ひけるが、肉のふとりをさけて童子にはうへ骨を争ひきはハ鵜鳥らうひぬ。此僧此所を去りたるををえて、たまたおどろき。捌ハ世に聞ゆる山うバなるめ。此人を喰おけバ鶴ふいまれてるもえんとおもふよ。聞もあぢる

もおふそりはゞ、あきれはてみおくりしが、とても遁れんやうすともかゝるふまじ。不経此身露命を惜まんよりて安うくめがて思ひ極めて一心ふ乱に経を読誦し座ふ深更もたちきしが此姥死人とをとを喰ひしまひて後童子のふいふ、経を念ふ読しよりやと童子かぶりをふりて、未ゆうばどのへバ姥は浮でさらそあらゝかゝりてす飽まで喰はせんとまちかへとひ童子ころへくごよひ宿まいりし旅僧をむ肉何ひ嫁とくて味よらんふなへとへといふ。姥がいひて我もさいおかへど骨ぐはひやおもけずして仏ふ御文その

こ論しゐ給ふ程に我いと是を聞すとれバ此僧經を誦す

試しでいふらく方安うしバ偏に我が出し經に迷ひうら

古へお(?)ざつゝにあるらん我へ能しでいと深まりくおもひ

わも言ゝらに此經を聞とれバ有る事もていふに

經文を讀ともきれけるく喰殺さんと思ひけるに蟒か

まへいろく海が及ぶ不まあらばさあらバ鬼神くうへ先

試んとてかの僧乃傍ちかく伺ひ寄しと此僧ろくぬ

讀まで經を唱へいふ〳〵此經を誦す時に此蟒が

深くて見らゝく喰ひつかんとせしが此僧御經を誦よ不動

尊の形を見へてしておそ怖しかりけれバ中〳〵寄

もつれぬに讀まる經文の功に蟒が多劫まぬかるゝく。

殊に苦しかりけれバ忽ち畜生道を追まし逃れ得脱

もありくと明けれバ此僧ハ何くともなく縁あらバ又参

らんなどいひて此宿を出られけれバ蟒も童子も名残お

しげに見おくりしが幸きいのちを助りて何くともなく

出られけるが是偏に經文の功徳とぞ聞人感を催し

今も此あたりには故なきかと哀しきものゝ哀を聞

へ侍りぬ

太平百物語巻之一終

新版

英本百[illegible]